

第4回ヘルスリサーチワークショップ 新しい医療のデザイン

崩壊から再生へ

趣意書

平成19年度でヘルスリサーチワークショップは第4回目を迎える。過去3回のテーマは「赤ひげを評価する」「2030年への羅針盤」「End of Life」とした。企画段階では強く意識したものではなかったが、結果的にそれぞれに時宜を得たものとなった。「赤ひげを評価する」では、いわゆるジェネラリストとしての医師の現代での有り様を越えて、ケアの継続性に対する強い希求が指摘された。「2030年への羅針盤」では、人類史上最も尖端を走る本邦の人口減少社会について、人口減少に歯止めをかける社会としての工夫が議論された。「End of Life」では、死が隠蔽され収納された現代日本社会においては、実は豊かな生のあり方自体を考える機会が失われているという指摘があった。それぞれに大きな問題で結論が出せるような話ではなかった。だが、参加者が前向きに問題に立ち向かい、その中で多くの出会いと学びでこのワークショップは着実に成長してきた。

この間に医療を取り巻く環境は大きく変化した。今や医療関係者の話題として口にのぼるのは「福島県産科医逮捕事件」「奈良県妊婦死亡事件」「医師不足」「勤務医集団退職」など、医療の崩壊に関する内容ばかりである。医療従事者にとって現代の医療は行き場を失って苦しんでいるように見える。「この国の医療は一度完全に崩壊してしまえばいいんだ。そこから新しいものが生まれるだろう」という過酷な労働環境で疲弊しきった医師の意見も耳にする。わが国において、今ほど、医療におけるブレークスルー（突破口）とパラダイムシフト（価値観の転換）が必要とされる時代はないように見える。

その一方で、現代の医療は本当に崩壊しかけているのか？ という問いかけも可能だろう。我々はともすれば、メディアの報道だけから物事を判断しがちである。果たして、患者や国民には医療崩壊という認識や経験はあるのだろうか。医療従事者はどのような困難を経験しているのか。立場が異なり見る角度が異なれば、問題点も違ってくるだろう。各自の肌感覚を大切に、現代医療の抱える問題点を再確認する必要がある。現代の医療は国民や患者のニーズに応えているのだろうか？ 誰にでも病気や怪我の経験があるだろう。そのような時に、心から満足した医療を受けることができたのか。また、なぜ健康食品、民間療法、健康番組が流行するのか、というのも同じテーマの裏表をなす問題であろう。生死に関わることだけでなく身近な経験を通じて、現代日本の医療の内容、医療にかかる費用、普段の生活における安心感なども考えてみたい。現代が大きな転換点であることは間違いない。これまで提供されてきた医療を従来型医療と呼べば、これはそれなりに機能してきた。しかしここにきて従来型医療が破綻し限界を露出した原因は何だろうか？ 「弱者切り捨ての歴代政権のせいだ」「医者叩きに血道をあげてきたメディアのせいだ」という医療側の声がある

幹事（左から）

中島 和江
中村 洋
長谷川 剛



世話人（左から）

後藤 励
島内 憲夫
中村 伸一
安川 文明
湯本 明子
吉川 菜穂子





一方、患者側からは「医師は自分さえよければそれでいいのか?」「赤ひげ精神はどこにいったんだ」という反論もある。自分の立場だけを主張して他者を非難していても事は解決しない。立場が異なり見る角度が異なれば、問題点も違ってくる。医療者はもとより、政治家、行政、国民、メディア、司法、そして患者も「ひょっとして自分も大なり小なり『医療崩壊』に加担しているのではないだろうか」という視点から考え直してみるのはどうだろうか。従来とは違ったものが見えてくるかもしれない。

これからの医療に期待されることは何であろうか? 世の中には健康人と病人しかいないのだろうか? 平均寿命が80歳を越える現代日本において、何の病気も持たずに過ごしている人の方が少数派であろう。かつては無病息災といわれたが、今では一病息災や多病息災が現実である。病気にならないための予防医学と同時に、疾病とのつきあい方も考えなければ社会そのものが成り立たない。この延長線上には「生きるとは何か」という問題がついてまわる。人は本当に長生きしたいと思っているのか。各自がどのように生き、どのように病気や怪我と向き合い、どのように死を迎えるのか、という人間として避けることのできない問いとそれに対する考え方によって、社会の中での医療の役割も変わってくるものと考え。

そこで、今回の企画は現代医療の直面している課題に真っ向から取り組むものとした。「新しい医療のデザイン - 崩壊から再生へ」というテーマである。今まさに壊れつつあるかのように見える従来型医療に対し、医療者はもとより、患者も、国民も、行政も、政治家も、メディアも知らないふりは許されない。あらゆる立場の人間が集まり、建前抜きの本音の議論を行い、様々なアイデアを出し合い、より良い医療のための設計図を描きたい。

医療の再生のためには、「これからの医療に対する期待と役割」が示されることが必要であろう。これらはまだ多くの人々が認識しておらず、十分に言語化できていないものである。財源や制度からの十分な議論も必要であろう。それと同時に、まだまだ生かされていらないリソースやネットワークにも目を向けてほしい。私達がまだ知らない素晴らしい試みもあるだろう。私達が想像もしなかったデザインが飛び出してくるかも知れない。世の中には素晴らしいアイデアが満ちている。今回のワークショップでの出会いと学びを通じて、参加者の英知を結集した医療再生のための設計図が描かれることに大いに期待する。

第4回ヘルスリサーチワークショップ幹事・世話人一同



幹事・世話人からのメッセージ

幹事 中島 和江

大阪大学医学部附属病院中央クオリティマネジメント部
病院教授

現代日本の医療は崩壊の危機に瀕しています。今回はその原因を分析し、医療を再生させるための具体的なプランを考えます。本ワークショップでは、立場や専門の異なる人々が、それぞれのアイデアやテーマをぶつけて議論を尽くし、患者のみならず医療従事者や一般国民の全てが満足できるような新しい医療が提示されることを期待しています。

幹事 中村 洋

慶應義塾大学大学院ビジネス・スクール（経営管理研究科）
教授

「崩壊から再生へ」というと、現代の日本の医療は崩壊していないという方も多いと思います。ただ私は、崩壊の芽は、小さいながらも、所々に存在しているように感じます。来たるワークショップでは、「崩壊しているかどうか」を議論するのではなく、本当に崩壊するかもしれないと言う「危機意識」を十分に持ち、新たな医療システムのデザインについて皆さんと様々な観点から議論できればと考えています。崩壊してからでは遅いのです。

幹事 長谷川 剛

自治医科大学医療安全対策部 教授

自分が使いやすいように器械を作り替える。他の人が困らぬように案内板を立てる。通行し易い様に道路のカーブを緩やかにする。これらの創意工夫、新しいなものかを生み出す工夫をデザインと呼ぼう。今回のヘルスリサーチワークショップは、新しい医療のデザインがテーマだ。私達は医療の何を守ろうとし、何を变えようとするのか？誰のために作り替えていくのか？新たな出逢いの中で数々の議論ができることは望外の喜びである。

世話人 後藤 励

甲南大学経済学部 准教授

医療を取り巻く環境が激変し、医療が世間の注目を浴びている現在は、新しい医療をデザインする絶好のチャンスともいえます。これまで二回のワークショップに参加しまして、医療を見る目には多様な視点があることをそのたび毎に痛感してきました。肩肘張らない議論の中で、自分の専門領域の限界を知りつつも可能性を再認識する。そんなワークショップになるためのお手伝いができたらと思います。

世話人 島内 憲夫

順天堂大学スポーツ健康科学部 教授

世界一の長寿国を誇る日本ではあるが、健康格差は拡大する一方である。この日本の現実を克服するためには、人々の健康を保健医療の専門家が考案した生物・医学モデルのみならず、社会科学の専門家が考案した生物・心理・社会モデルによって捉え直した新しい保健医療のデザインが必要である。今回で4回目を迎えるこのワークショップは、まさに未来に向かって学際的な視点から議論するとともに、夢を語り合える仲間が集う場と言えるだろう。皆さん、保健医療の専門家の枠組みを越え、ソーシャル・キャピタル（社会資本）を活用した“健康社会デザイン”を描いてみませんか。

世話人 中村 伸一

国保名田庄診療所 所長

医療行為の末に不幸な結果に終わった場合、なった病気よりも携わった医療者側を恨むような人が多くなりつつある。医療者側は防衛的な医療にならざるを得なくなり、その結果、過剰検査や萎縮治療に陥ってしまう。医療崩壊の根底に潜むのは、制度やシステムの問題だけではなく、患者側と医療者側の間にある相互不信という深い溝のような気がしてならない。マクロな視点とミクロな視点の両面で、医療再生に向けた議論を期待したい。

世話人 安川 文朗

同志社大学大学院総合政策科学研究科
医療政策・経営研究センター センター長

かつてある社会学者は「医療そのものが健康に対する脅威になりつつある」と警告しました。医療の高度化、専門化は多くの果実をもたらしましたが、同時に本来その「生」が護られるべき人間を、医療の「制」を維持する働き手にしてしまいました。医療のための人間から、人間のための医療に立ち返ること、これこそが、新しい医療デザインのイメージであり、よりどころです。そのよりどころをぜひ皆さんと一緒に探したいと思います。

世話人 湯本 明

ファイザー（株）経営企画部門 統括部長

“医療の崩壊”、“皆保険の限界”といった言葉を耳にする。日本の医療制度は転換期である。しかし、多くの国民が適切な医療を受けられない不平等を容認する先進国になるのか？それとも、開かれた医療を持続可能なモデルで再構築できるのか？また、“病気への取組み”を中心とした医療、“Sick Care”から、予防医療を介した健康増進モデル、“Healthcare”への転換をどう図るか？この点から、今回“新しい医療のデザイン”を考えてみたい。

世話人 吉川菜穂子

聖路加看護大学看護実践開発研究センター 助教（シニア）

私たちは必要な時に心から満足した医療を受けたいと願います。そのためには医療の質をさらに高め、医療の受け手1人1人の力をつける支援が大切であると考えます。日本の医療を救うためには、予防医学の強化も必要です。禁煙の問題やメタボリックシンドロームなど私たちの生活習慣や、生活の場といった視点から医療を創造し「健康」をつくることのできるのではないのでしょうか。これからの医療に期待されることを普段の生活における安心感なども考えつつ共に語り合いましょう。